

「お宝を求めて——篠井金山の採掘」

宇都宮伝統文化連絡協議会員 柏村 祐司



金山坑口跡

「ハアー 曇るガンガラ 宝
の山よ 星に黄金が流れ出る
ハアー佐竹奉行はおいらの主
よ 恵みあつきで精が出る」
この歌は、宇都宮市の無形文化財に指定されている「篠井の金堀唄」の一節で、篠井に金山があつた頃、工夫の間で唄われた金鉱石採掘時の作業唄である。ガンガラとは、篠井金山の二つ檜名山のことという。

篠井金山の由来については、戦国時代佐竹氏によるとする説がある。その二つが、檜名山麓にある東海寺に伝わる話で、境内にある虚空蔵堂は、長禄年間(一四五七~五九)佐竹氏

が篠井金山を開発した時に、佐竹氏領内の現茨城県東海村の村松山虚空蔵堂より虚空蔵菩薩を勧請して堂を建立し、金山の守護寺としたものだといいう。

佐竹氏由来説のもう一つは、慶長三(一五九八)年、諸国のが金銀山から秀吉に運上した高銀山を記録した「豊臣氏藏納目録」にある「下野 十八枚四両三分 下野宇都宮領黃金山」を記録した。金堀唄にある「佐竹奉行はおいらの主よ」の文言は、

（二六〇二）年、佐竹氏は徳川家康の命により秋田へ国替えとなり、篠井金山の採掘は終わった。金堀唄にある「佐竹奉行はおいらの主よ」の文言は、佐竹氏による金採掘を伝えるものといわれる。

浅野弾正(長政)は、金山といえども、「浅野弾正」という記述である。浅野弾正時代、宇都宮領で金山といえども、「浅野弾正」という記述である。その二つが、檜名山麓にある東海寺に伝わる話で、境内にある虚空蔵堂は、長禄年間(一四五七~五九)佐竹氏

は、慶長二年に宇都宮国綱が秀吉により改易された後のわずか六ヵ月間宇都宮を支配したに過ぎない。こうしたことから慶長三年、秀吉に運上した宇都宮藩領からの金は、浅野以前の、佐竹氏の採掘によるものということが通説となつてゐる。秀吉の時代、佐竹氏は常陸国内を広く領有し、領内

にて操業を開始した。この結果、二十貫余の産金をみたという。地元に残る「金山千軒・徒千軒」の伝承は、安政年間の篠井金山の賑わいを言い伝えたものと言われる。

しかし残念なことに、安政以後の宇都宮藩における篠井

金山の記録は見当たらない。

資金不足や採掘技術の未熟さにより金山操業が失敗に終わつたからではないかといわれてゐる。その後、明治初年、明治新政府の金融財政政策を担当した由利公正が外国人技師を招いて採掘にあたつたが、思

うようには進まず失敗した。そ

の後、三井、大篠鉱山、日立

鉱山、日東鉱山、富井鉱山(東

邦亜鉛)へと採掘が引きつれ

たが、いずれも十分な成果を

上げることが出来ず現在は廃

坑となつてゐる。金はもう出ないのか。夢は尽きない。

ところで、浅野弾正(長政)は、慶長二年に宇都宮国綱がおぼろげながらの篠井金山採掘の歴史にあって明確な記録は、江戸時代安政三年(一八五六)年、宇都宮藩が幕府に出した領内篠井村男山・鳥ノ子における金採掘願い、および採掘するための助成金の嘆願書である。これらによると宇都宮藩では試掘の許可を受けた後、採掘を行い九貫もの金の产出を見た。そこでさらに人数を増やし本格的に金の採掘をするために、幕府に一度の前貸金助成を嘆願し、都合一万五千両の助成金を受



金鉱石を磨る石臼